

1. ザゼンソウ

雪の残る早春に開花するザゼンソウ *Symplocarpus foetidus* var. *latissimus* はサトイモ科の多年生草本です。サトイモ科はその多くが熱帯地域の植物ですが、ザゼンソウやミズバショウ *Lysichiton camtschaticense* は寒冷な地域に分布しており、独特の進化を遂げています。開花期は雪がまだ残る早春で、苞の中心から伸びる軸に花を多数付ける「肉穂花序」と呼ばれる形態が特徴的です。ザゼンソウはミズバショウに似ていますが、花序全体を包む巨大な苞（仏炎苞）は厚く、白色ではなく暗紫褐色をしています。苞の高さは 20 cm 程度で、花茎は非常に短く、肉穂花序も球形なため、全体としてずんぐりした印象をうけます。その独特の姿を僧侶が座禅している姿になぞらえて「ザゼンソウ（座禅草）」と命名され、有名な禅僧である達磨大師にちなんだ「ダルマソウ（達磨草）」という別名もあります。

肉穂花序はハエなどの受粉昆虫をおびき寄せるため強い悪臭と同時に大量の熱を放出するので、仏炎苞の内部は外気温よりかなり高く保たれます。花全体も外気より温かくなるので、ザゼンソウの周りだけ雪が溶けているのがしばしば観察されます。

ザゼンソウはアジアではサハリンからアムール地方に分布しており、日本では北海道から本州にかけての湿った原野や谷地で見ることが出来ます。北アメリカ東岸にも分布し、仏炎苞の姿と開花時の悪臭から「スカンク・キャベツ (skunk cabbage)」と呼ばれます。北米では根を喘息や頭痛の治療、止血に用い、根毛は歯痛を抑える効果があるとされます。ちなみに仏炎苞が黄色いため「イエロー・スカンク・キャベツ」と呼ばれる植物はザゼンソウではなくミズバショウの一種であるアメリカミズバショウ *L. americanum* のことです。

ザゼンソウは本園では湿生園で見ることが出来ます。



ザゼンソウ (*Symplocarpus foetidus* var. *latissimus*)

2. カサスゲ

スゲは日本中で見ることが出来るありふれた植物ですが、「スゲ」というのは一種類の植物をさすのではなく、カヤツリグサ科スゲ属全体の総称です。その種類は非常に多く、全世界でおおよそ 1800 種、日本だけでも 200 種以上が自生します。形質も多様で、種内でも変異の幅が広く、分類するのが難しい植物として知られています。

カサスゲ *Carex dispalata* はスゲ属の一種で、川や池の周囲などによく見られる多年生草本です。北海道、本州、四国、九州、色丹島、サハリン、朝鮮半島、中国中北・東北地方、東シベリアに分布しています。草丈 70～100 cm で、太くて長い地下茎があり、目立たない小さな花が 4～7 月に咲きます。

かつては水田や水路、ため池などに自生するありふれた植物だったので蓑や笠など様々な民具の材料として使用されていました。特に笠の材料としての利用は多く、そのため「カサスゲ（笠菅）」と呼ばれるようになったと考えられています。笠や蓑の需要が大きかった時代には、カサスゲを育てるための水田を確保し、スゲ笠作りを農家の副業としていた地方が日本各地にありました。なかでも富山県高岡市ではカサスゲの栽培とスゲ笠製作が一大産業となり、明治時代には町の税収の 7 割をスゲ笠産業が占めていました。昭和時代前半までに全国シェアの 9 割を占めるようになったそうです。しかし戦後、ビニールやプラスチック素材が普及したために需要が減り、スゲ笠産業は衰退してカサスゲ田は急速に姿を消しました。また水田やため池の減少、湿地の開発などにより今では野生のカサスゲも数を減らしつつあります。

カサスゲは本園では湿生植物園で見ることができます。



カサスゲ (*Carex dispalata*)

3. ミツガシワ

ミツガシワ *Menyanthes trifoliata* は寒冷地の湿地や沼の水深の浅いところに生育し、世界的にみると北半球の北緯 35 度から 70 度付近に広く分布する極地周辺植物と呼ばれる植物のひとつです。日本では北海道、本州、九州に自生しますが、南の地域のミツガシワは氷河期の寒い時代に南に分布を広げた生き残りと考えられています。ミツガシワは古くからある植物で、西シベリアでは漸新世（3800 万年～2300 万年前）の化石が発見され、日本では 180 万年前の種子の化石が発見されています。

カシワの葉に似た小葉が 3 枚、長い葉柄の先に集まってつく姿から「ミツガシワ（三つ柏）」と呼ばれます。5 月から 8 月頃、葉より長く直立した総状花序に白色の花を付けます。一つ一つの花は小さいですが、花卉の内側に白い糸状の毛が密生するという特徴的な姿をしています。種子は長さ 2～3 mm の平たい楕円形で、黒っぽい表面には光沢があって水をはじくため水面上に浮かび、水流に乗って分布を広げます。また、地下茎を横に伸ばすことによっても生育範囲を広げ、大群落を形成することがあります。

カナダ極地に住むイヌイット族はミツガシワの根をすりつぶしデンプンを含む粉をとるほか、ヨーロッパでも昔から非常用の食料とされ、また乾燥した葉はお茶の代用品とされました。苦味成分ロガニンおよびゲンチオピクリンまたはスウェルチアマリン類似物質などを含み、葉を噛むと非常に苦いため、ドイツ語では「苦いクローバー (Bitterklee)」と呼ばれるほどです。そのためスウェーデンでは苦みのある葉がホップの代用品として利用されています。漢方では乾燥葉を「睡菜葉 (すいさいよう)」といい、苦味健胃剤として用います。また根茎は「睡菜根 (すいさいこん)」と呼ばれ、鎮咳、消炎、強壮効果があるといわれます。

ミツガシワは本園の湿生植物園、バラ園および温室中庭の池などで見ることができます。



ミツガシワ (*Menyanthes trifoliata*)

4. ミゾソバ

タデ科のミゾソバ *Persicaria thunbergii* は日本、朝鮮半島、シベリア東部、中国、インドシナ半島を経てヒマラヤにまで広く分布する一年草です。水路（溝）に生えているソバのような植物という意味で「ミゾソバ（溝蕎麦）」と命名されたのは、水辺近くを好んで自生し、種子の形がソバに似ているという理由からです。茎の下部は地を這い、よく分岐して節から根を出します。この匍匐茎から稜のある茎が斜めに立ちがり、高さ30～70cmとなります。

稜には細かいトゲがあります。葉は長さ4～10cmの鋒形^{ほこ}で、別名の「ウシノヒタイ」は葉の形が正面から見た牛の顔に似ていることから命名されました。

花の色は紅紫色で花卉の付け根は白色です。花期は8～10月で、10～20個の花が頭状に付きます。そのため蕾の集まりは突起だらけの玉に見え、それが金平糖に似ていることから「コンペイトウグサ」と呼ぶこともあります。

名前はミゾソバでもソバのように食用にはされませんが、『大和本草』（1708）には生の葉をすりつぶしたのものには止血作用があるという記述があります。また、打ち身・骨折に効果がある飲み薬として販売されていた「石田散薬」と呼ばれる粉薬はミゾソバの全草を乾燥させ粉末にしたものだとされています。

「石田散薬」は幕末の新撰組で有名な土方歳三の実家に伝わるもので、土方家のある武蔵国石田村（現東京都日野市石田）の地名から名付けられたようですがはっきりしたことは不明です。土方歳三は若いころこの薬を売り歩いており、新撰組にも常備薬として置かれていたそうですが現在は薬効が認められていません。

ミゾソバは本園では湿生植物園で見ることができます。



ミゾソバ (*Persicaria thunbergii*)

5. ヤチダモ

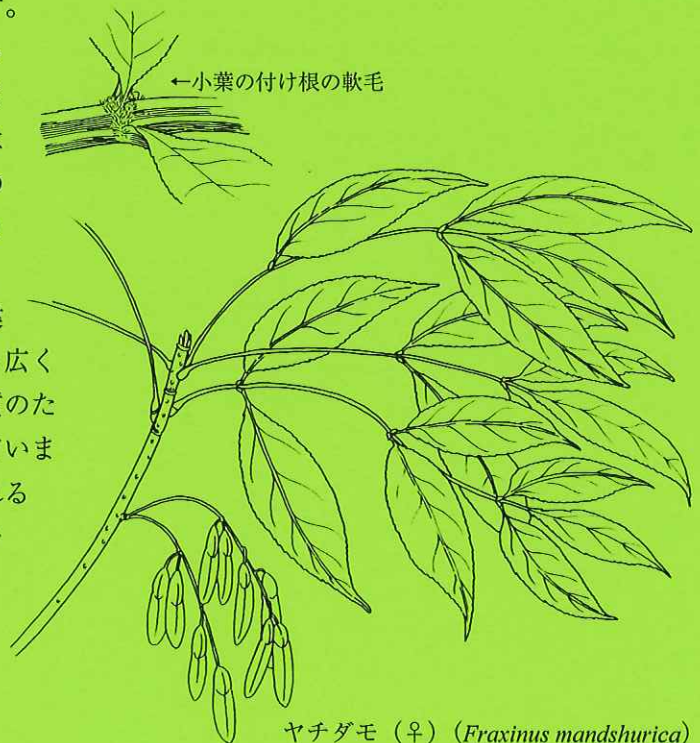
ヤチダモ *Fraxinus mandshurica* はモクセイ科トネリコ属の落葉広葉樹です。アイヌの神話では、下界の番を神に命じられたフクロウが、始めはハルニレの樹の天辺にとまっていたましたが人間の数が増えてきたので森の中で一番高いヤチダモの樹に飛び移って見張りを続けたといわれています。この神話で語られるように非常に大きな木で、直径1 m、高さ30 m以上に達することがあります。

川岸や湿地周辺などを好み、ヤチダモ単一林（ヤチダモだけで出来ている林）を形成しますが、山すそなど比較的乾燥した場所では他の広葉樹に混ざって生育することもあります。北海道のほか、朝鮮半島、中国東北部、サハリン、沿海州に分布します。本州では長野県以北に分布しますが、稲作普及前の縄文時代（約5000年前）には東京周辺の低地に大規模なヤチダモ林が形成されていたことが発掘されたヤチダモの根や倒木からわかっています。

ヤチダモは雌雄異株で、開花期は4～5月ですが、雄花も雌花もがくは小さく花びらもないため地味で目立ちません。葉は7～11枚の小葉からなり、小葉はほとんど無柄で、付け根に赤褐色の軟毛が密生しているのが特徴です。

日本産の広葉樹としては樹幹がまっすぐで枝下も長いため、大きな材がまわって手に入ることから、かつては造船資材として重要でした。アイヌの人々は丸木舟を作る際、最高の材料としてヤチダモを選んだといえます。加工しやすく、材面が美しいので、建築材、家具材や装飾材、楽器などにも広く用いられました。硬く折れにくい性質のため、スキーやバットの材料にも適しています。昭和のホームラン王として知られる王貞治選手のバットは北海道産のヤチダモ材でした。

ヤチダモは本園では湿生植物園で見ることができます。



ヤチダモ (♀) (*Fraxinus mandshurica*)

6. オノエヤナギ

オノエヤナギ *Salix udensis* は湿地や川岸に生えるヤナギ科の落葉高木です。主幹は高さ5～10 m。全高は20 mにもなることがあります。多くのヤナギの仲間と同様に雄株と雌株とがあります。枝は真っすぐ伸び、横にはあまり広がりません。葉は披針形で10～16 cmと細長く、そのため、ナガバヤナギ（長葉柳）という別名もあります。ほとんど無毛ですが、冬芽は柔らかい毛におおわれています。花期は北海道では5月、本州では3月下旬から4月下旬です。

オノエヤナギは牧野富太郎が四国の山中で採集し、新種の *S. shikokiana* と発表した時に「尾上柳」と命名されたものです。牧野は「峰の上（おのえ）ヤナギの意味である」と記述しており、実際四国では山地、高地で見られますが、本州中部以北では低地、とりわけ川岸に多く自生しています。オノエヤナギは北海道に多く、本州山地でも普通にみられますが、牧野が最初に採集した四国では少ないため、「『尾上』ヤナギ」という名称は実態と合わないと感じるかもしれません。

国外では他にカムチャッカ半島、中国東北部、東シベリア、サハリンに分布します。

材は柔らかく、あまり利用されることはありませんが、アイヌの人々はイナウ（木幣）の材料としていました。

また、オノエヤナギの栽培品種にセッカヤナギ *S. udensis* 'Sekka' があります。これは枝の部分が異常に扁平化する「帯化現象」のために幅が5～6 cmにもなったもので、その特徴的な姿から生け花の材料として珍重されています。

オノエヤナギは本園では湿生植物園で見ることができます。



オノエヤナギ (*Salix udensis*)